

# Re:

## Decorative Arts



女子美術大学

(仮称) 町田市立国際工芸美術館

×

# Re: Decorative

## (仮称)町田市立国際工芸美術館

町田市立博物館(現在休館中、(仮称)町田市立国際工芸美術館として開館予定)と女子美術大学は、2025年度に連携授業を実施しました。本展「Re: Decorative Arts」は、その成果発表展です。女子美術大学デザイン・工芸学科でガラスと陶を専攻する学生たちとともに、町田市立博物館が所蔵する作品について、技術や意匠はもとより、それらが制作された社会的・文化的背景への理解を深めつつ、各時代や民族間における工芸の意味合いを検討しました。学生たちは過去を通じて現在を思考し、もっとも刺激を受けた作品(A~M)をもとにして、みずからの表現へと昇華(cat.nos. 1~24)していきました。技法、形態、色彩、文様、用途、はたまた作品に纏わるエピソードなど、何に惹かれ何を汲み取ったのか。「工芸とは何か」という問いかけへの各々の返答をお楽しみいただければ幸いです。



セーヴル

- A 《上絵金彩透かし七宝文カップ&ソーサー》フランス 1846年  
B 《上絵金彩花文カップ&ソーサー》フランス 1767-1768年  
C 《白磁金彩七宝飾カップ&ソーサー》フランス 1785年

フランスのセーヴル窯は、王侯貴族の庇護のもと1740年に設立されたヨーロッパを代表する名窯。24金の使用など贅の限りが尽くされた作品は、高い人気を誇る外交贈答品であっただけでなく、趣味の良さや豊富な財力を顯示するためのアイテムとして、上流階級の暮らしに欠かせなかった。18世紀半ばから19世紀半ばにかけて製作された作品は、いずれも年月の経過を感じさせないデザインで、それぞれ精緻な透かし彫り(A)、手描きで1点ずつ施された金のドット(B)、宝石装飾を模した瑞々しいエナメル彩(C)が見どころである。

# Arts

## × 女子美術大学 展

### 連携授業記録

- 2025年7月 学芸員による講義@女子美術大学  
2025年8月 作品実見1@町田市立博物館  
2025年10月 作品実見2@町田市立博物館  
2025年11月 構想発表・中間講評@女子美術大学  
2025年11月~ 作品制作(指導:陶 小山暁子・柴田菜月、ガラス 加藤尚子・作田美智子)/  
チラシ案の作成(指導:川崎綾)  
2026年1月 作品撮影(指導:古熊美帆)  
2026年3月 「Re: Decorative Arts」展開催@町田市立国際版画美術館 市民展示室

図版A~M: 町田市立博物館所蔵作品

図版1~24: 女子美術大学学生作品



- D 《三彩花文水注》中国 16世紀  
E 《緑釉皮囊壺》中国 11世紀  
F 《灰釉兔形壺》《黒褐釉兔形壺》クメール 12-13世紀

制作された時代や地域は異なるものの、人々の暮らしに寄り添い、束の間の楽しみを与えるという点において共通した作品。釉の混じり合いが目を楽ませる水注(D)には、なぜかネズミの把手が付随し、お茶の時間を笑いで包む。動物と人の距離が近かったクメール王国(現在のカンボジア)では、それを象った作品が多くみられ、兎形の容器(F)は嗜好品のキンマを楽しむ際に必要な石灰入れの役割を担い、来客をもてなした。遊牧民が馬で移動する際に携帯した革の水筒は、陶磁器に置き換えられ(E)、鑑賞品として新たな生を与えられている。



G 《蓋付ダブルゴブレット》ボヘミア 18世紀

婚礼の場面でワインを飲むために下を新郎、上を新婦が使用した。表面には天使が彫られ、持ち手と蓋には赤色ガラスによるレース装飾が施されるなど華やかな雰囲気醸す。この赤色は材料に金を添加したことによる発色で、当時ガラスの研究・実験を行っていた錬金術師が発見した。



K

K 《青色鼻煙壺》中国 清時代



L 表

L 《白地多彩猫菊蝶文鼻煙壺》中国 清時代



L 裏



M

M 《瑪瑙色二連鼻煙壺》中国 清時代

鼻煙壺とは嗅ぎタバコを入れるための容器。単色のもの(K)、形そのものが植物や石を模しているもの(M)、表面に重ねた別のガラスを削り出して文様を表したもの(L)など多種多様な鼻煙壺が作られた。文様は中国で縁起が良いと考えられていた動植物の組み合わせで構成される。



H

H 《アルモラチャ》スペイン 18世紀



I

I 《ポロン》スペイン 18世紀

J 《カンティル》スペイン 18世紀



J

これら3点は18世紀のスペイン・カタルーニャ地方で制作された。スペインのガラス製品は技術的にはガラス先進地ヴェネツィアの影響を受け、無色透明ガラスと白色・青色ガラスを組み合わせで装飾されたものが多い。一方、造形的には土地の文化や慣習に合わせスペイン独自のスタイルが発展した。

儀式や祭りで用いられたアルモラチャ(H)は、その細い腰部を手で掴み振ると、垂直に伸びた4つの突起から香水やバラ水が散布される。胴部から極端に伸びた注ぎ口が特徴のポロン(I)、環と広狭2種の口が付いたカンティル(J)は、どちらもワインなどを回し飲むための容器である。一見すると合理性がなく無駄が多い造形のように感じるが、人々の生活を彩り豊かにするという大役を務めあげていた。



1 竹内真帆《Transparent et magnifique》/B

18世紀の風俗を反映して、誰かに贈るドール・ハウスをつくったなら



2 佐藤弓華《重ねる彩、現代のひととき》/C

町田市の文化風土に着想を得た茶器で楽しむ、目にも嬉しいお茶の時間



3 千葉舞乃《過剰の美学》/A

機能を備えつつも美が追求された茶器に、凛とした孔雀の姿形が重ね合わされる



5



4

4 白井さくら《見つめるもの》/A

王侯貴族の散財により国が傾き革命へと発展した、フランスの動乱とその行く末をみつめる

5 鈴木枝里香《共存》/A

異国への憧憬は、自国の文化や価値観と混ざり合い、新たな花を咲かせる



6



7

6 イ・ハウン 《愛の誓約》/G  
婚礼の儀 覚悟を胸に二人は誓いを紡ぐ

7 山田莉穂 《おもいあう》/G  
注がれたワインの量は同じに見える  
でも二人が感じた味は同じだろうか

8 鵜飼いつき 《業》/G

結ばれた二人から誕生した生命は  
やがて、また、否応なく

9 今井柊花 《あらい》/G

二人でひとり 二人の個人  
今ここにある婚姻のかたち



8



9



10 前畠彩那《人体錬成》/G

無理だと分かっているが  
それでも若き錬金術師はヒトを作りたかった

11 吉田すみれ《拡散する記憶》/H

あの花を見ると臍気のある光景を思い出す  
うつわから振り撒かれた芳しい香りとともに

12 馬場陽光《滴る》/I

曲線を描き注がれるワインのように  
織りなされるレースのように  
二色の土は複雑に絡み合っ



11



12



13 志村江葉果《こころのね》/J  
一期一会の仲間と心を重ね 一つの碗でお抹茶を



14 増田夏海《慈悲》/J  
作り手のやさしさが回し飲み用の容器を使いやすく洗いやすく



15



16



17

15 岩月渚沙《一雫のかおり》/K

宝石のような小瓶から溢れ出すものを

16 奈良秋穂《亀遊花魚祈寿》/L

思い出の動植物として表れた祈りと記憶をのせ 今日も一歩ずつ進み続ける

17 海老沢紗良《Eau de Cologne: コウモリ・金魚・蝶》/L

蝶 コウモリ 金魚 安らぎと幸福を届ける動物たちが香水瓶に



18 山下真央《双子果》/M

双子に生まれた硝子の果実は偶然か必然か



19

19 間馨月《居場所》/D

トムとオエリーよろしく、人間の世界で楽しみを見出す動物たちに思いを馳せたら

20 趙雨萌《バルーンスカート》/D

放射状に広がる連弁花はバルーンスカートに見立てられ、溶け合う釉が風をはらむ



20



21 張雅斯《定まらないあり方》/E

自然の摂理と環境により決定づけられる物事、遊牧民に重ね合わされた棘が形作るものとは



22 市野遙香《かりそめの魅惑》/E

あらゆるものを写してきた陶磁器の歴史、遊牧民の革の水筒も現代人のゼリー飲料もお手のもの

23 鈴木更紗《白伸兎形壺》/F

折りたたまれた脚をめいっぱい伸ばし、彼方を見つめてクメールの大地を駆けぬける

24 高田歩実《鷺鳥型供物用器物》/F

動物を模した陶器に宿る、供物入れとして用いられていたかもしれない遠い日の記憶



23



24

ガラス分野では、ガラスの素材を使い電気窯を使用することを条件として、制作を行いました。所蔵作品のリサーチから多くの言葉や形を探し出し、各々の解釈へと繋げていくと、同じ作品を選んだとは分からないほどの豊かな感性や発想が生まれました。今回は作品を作るだけでなく、チラシのデザインや写真撮影も授業に組み込み、展覧会を行うところまでを達成目標としました。限られた時間の中で、作品完成に向けた学生の熱意は素晴らしいものでした。「Re: Decorative Arts (工芸を再考する)」というテーマは、工芸作品からその時代の文化や歴史だけでなく人々の想いや暮らしを紐解くことができ、そこから生み出された学生の解釈は非常に興味深いものがあります。また、その中に変わるもの、変わらないものの存在が浮かび上がり、今の生活を豊かにするヒントをこの展覧会を通して見つけ出すことを期待したいと思います。

女子美術大学 芸術学部 デザイン・工芸学科 工芸専攻  
准教授 加藤尚子

この度の連携授業では、所蔵作品の歴史的な背景や文化に触れ、その造形や表現を読み解き、学生の現代的な視点でどう再解釈され作品化されるのか、非常に興味深いものでした。学生は、知り得た知識と自らの視点や思考を、無から造形におこします。その過程では、再現ではなくどう新たに表現していくかを考え、また陶芸を学ぶ者として陶土から釉薬調合、上絵にいたるまで技術の挑戦がありました。現在の力量と理想の間で、試作の仕上がりに戸惑い悩み、試行錯誤をして完成させた作品たち。その作品たちは瑞々しく、また一つとして似ておらず、個々の解釈と発想、その表現の多彩さを感じさせます。

「Re: Decorative Arts」展では、所蔵作品と学生作品という違う時代に制作された作品を同時に鑑賞することができます。所蔵作品への理解はより深いものとなり、その素晴らしさを感じるはずで。同時に、自由な発想で美術の地平を広げる可能性に満ちた表現の成果を鑑賞者に楽しんで頂けることを期待しています。

女子美術大学 芸術学部 デザイン・工芸学科 工芸専攻  
助教 小山暁子

---

## 「Re: Decorative Arts (仮称)町田市立国際工芸美術館×女子美術大学 展」

発行日 2026年3月13日  
編集 加藤尚子、小山暁子(女子美術大学)・山口敦子、飯岡遼(町田市立博物館)  
印刷 ニューカラー写真印刷株式会社  
刊行物番号 25-56  
発行 町田市立博物館  
〒194-0032 東京都町田市本町田3562番地

本冊子は、2026年3月17日～3月29日に町田市立国際版画美術館・市民展示室で開催する「Re: Decorative Arts (仮称)町田市立国際工芸美術館×女子美術大学 展」に合わせて作成しました。

本冊子はクリエイティブ・コモンズ・ライセンス4.0(表示・非営利・改変禁止)で提供します。  
この冊子は4,000部作成し、1部あたり単価は110円です。



イベント情報を見るなら  
博物館公式 X

作品画像を見るなら  
博物館公式 Instagram

